研究ノート

植民地都市史研究の成果と課題（2）

橋　谷　　弘

1　はじめに
2　日本の植民地全般
3　台湾
4　朝鮮
5　中国
6　おわりに

1　はじめに

筆者は，2018年に「植民地都市史研究の成果と課題」を発表した（以下，これを「旧稿」と記す）[1]。本稿は，その続編にあたる。その後5年間で，旧日本植民地の都市史に関連する研究はさらに進展し，様々な新しい論点もあらわれてきた。これを紹介するのが本稿の目的である。あわせて，旧稿執筆時点で未見だった研究や，紹介を失念していた研究についても，本稿で補いたい。紹介の対象は，旧稿と同じく単行本に限定し，論文は取り上げない。また，学術書は可能な限り網羅したが，一般読者向けの本は必要な範囲での言及にとどめた。ただし，外国で出版されて日本の一般書店に並ばない本は，学術書に限らず対象を広げて紹介したい。なお，本稿では敬称を省略し，地名は当時の表記を使用した。

本論に入る前に，旧稿で植民地都市の研究史に関する先行論文への言及を失念したので，改めて紹介しておきたい。都市社会学の分野では，永井良和の包括的な論点整理がある[2]。永井によれば，近代都市の成立や現代都市の国際化を考える際に，植民地都市というテーマを社会学の研究に組み込む意義は小さくないとされ，その研究動向が手際よく整理されている。そして，植民地都市の構造や異文化接触という社会学的な関心から，永井自身の見解も示されている。少し以前に出された論文だが，植民地都市史研究に必要な数々の論点と問題提起が示されており，今日でも研究の出発点として読むに値する内容である。また，人文地理学の分野では，『人文地理学事典』に「近代植民地の都市と地域」（山元貴継執筆）という項目が設けられ，人的・物的移動，景観，地域構造の改編について，地理学の観点から研究課題が示されている[3]。

2　日本の植民地全般

旧稿でも論じた植民地都市とモダニティの関連について，朝鮮と台湾を比較した研究としてKim, J. E.［2019］が出た。著者は韓国文学・文化の研究者で，主に文学作品の分析を通じて，都市景観，街路（詩的言語），消費（百貨店），女性（印刷メディア）に表れたモダニティに注目している。そして従来の研究が朝鮮と台湾の相違を論じていたことに再考を促し，日常空間や文学空間のモダニティの共有に注目して，植民地間の関連がグローバルモダニティの形成につながったと主張している。評者も，両大戦間期以降のアジア都市のモダニティの共時性に注目しており，興味深く読むことができた。

同様のテーマで，旧稿の紹介から漏れたものに伊藤るりほか編［2010］があるが，同書はモダンガールをキーワードとして，台湾・朝鮮だけでなく日本本国や上海も視野に入れた共同研究の成果である。従来の研究が，モダンガールと名指された主体の検討か，あるいはそれを好奇と揶揄の的とした言説や表象の検討だったのに対して，同書はこれら二つを惹き付けた「像としてのモダンガール」の検討という第三の問題系を提示し，それを東アジアの植民地近代という歴史的文脈の中で解き明かそうとしている。東アジアにおけるモダンガール現象は普遍的にみられ，その舞台は都市が中心である。従来は男性の視点に偏ることの多かった都市史研究のジェンダー化を図るという意味でも，これら二つの著作と，朝鮮の項目で触れる서지영［2013］の問題提起を，積極的に受け止めるべきだろう。

次に，植民地神社に関して，旧稿から漏れた二つの著作を補っておきたい。一つは，辻子実［2003］で，植民地に建てられた神社を「侵略神社」と規定し，皇民化など植民地政策との関連で各植民地の神社について概観している。これが戦後日本における近現代史研究の問題意識を反映した著作とすれば，近年の研究動向につながる視点が示されているのが，中島三千男［2013］である。中島は植民地神社を「海外神社」と定義したうえで，その跡地の景観変容を「改変・放置・再建・復活」の四つに分類して事例を紹介し，さらに景観変容の五つの要因について論じている。小冊子ながら多くの調査に裏付けられ，論点が良く整理されている。近年は，このような景観変容を含む植民地神社の現況とその意味を論じる研究が盛んになっているが，これについては台湾の項目で紹介する。神社は都市固有のものではないとしても，主要な神社は都市に置かれ，宗教だけでなく文化的・社会的にも影響力を持ち，しかも遺構はポストコロニアルの問題の一つでもあるので，植民地都市史研究にとって今後も重要なテーマになるだろう。

陳姃湲主編［2018］は，植民地期下層社会に関する台湾・韓国の共同研究だが，扱われるテーマは衛生，視覚障害者，遊郭，都市貧困層，暴力集団など，当時の都市問題を象徴する分野である。収録された論文の主張は多岐にわたるため，個々の具体的な内容紹介は割愛するが，それぞれ優れた実証研究であり，このような比較史的な共同研究が多くの分野で継続

されることを期待したい。

ユニークなテーマとしては，Huang and Lee［2019］が，旅順（中国）・西大門（韓国）・台北と嘉義（台湾）に残された植民地期の刑務所を調査している。同書によれば，近代刑罰制度の導入は，「文明化」された日本を西洋に示すものであり，植民地の「文明化」も正当化したという。そして刑務所の保存に関して，記憶の消去 Not Remembering，記憶の選択 Selective Remembering，記憶の修正 Corrective Remembering という三つのモデルを提示したうえで，調査に基づいて，政治的課題の追求や遺構周辺のジェントリフィケーションなどさまざまな目的や帰結が紹介される。さらに，植民地期の刑務所が地域を超えて形成したネットワークや，現在の保存施設の協力ネットワークにも着目している。刑務所という特殊な施設を議論の対象としているようにみえながら，日本の植民地支配やポストコロニアリズムという一般的な課題に答える優れた研究成果といえるだろう。さらに，植民地文化遺産の保存と展示に関する研究は，台湾と朝鮮の項目でも紹介する。

3　台湾

まず，基隆という一つの植民地都市を舞台としながら，台湾の近現代史全般に及ぶ普遍的問題提起を行った研究として，Dawley［2019］をみていきたい。同書によれば，基隆の地域エリートは日本の主導した同風会・信用組合・公益社で中心的な役割を果たす一方，廟の祭祀など宗教活動で台湾文化を維持し，総督府の社会事業の担い手となって独自の台湾ナショナリズムを構築した。そして，そのような台湾ナショナリズムは，国民党政権成立後も保持されたという。日本とも大陸中国とも異なる台湾ナショナリズムという枠組は，近年広くみられるが，本書の都市社会分析がその実証に十分成功しているかどうかは疑問も残る。分析の対象は基本的に地域エリートに限られ，しかも皇民化教育などの影響を受ける前の世代が中心で，さらに台北などで展開された台湾文化協会などの活動は部分的にしか現れていない。また，台湾社会の現況に「台湾人」としての一体性よりも，多様性を見出すことも可能だろう。後半の章で示される国民党政権との距離感についても，日本での研究の蓄積と合わせてさらに議論する必要がある[4)]。著者も言及する京城府を分析した Henry［2014］との比較検討もさらに必要だろう。本書の問題提起を受けて，今後の研究の深化が期待される。

冒頭にも述べた神社に関しては，様々な立場から紹介や考察が続いている。学術書ではないが，400 か所以上の神社遺構を踏査した成果をまとめた労作が，金子［2018］である。植民地期の制度上の「神社」だけでなく，小さな祠まで網羅されており，台湾でも翻訳が出版された。著者は台湾駐在の経験を持つ企業人だが，叙述は客観的で，一種の事典のような使い方もできる。また，第三部の「台湾の神社への疑問」で示された論点は，歴史研究者も回答を求められていると考えるべきだろう。

これに関連して，植民地神社の再建について，野口［2023］が重要な問題提起をしている。紹介された事例は，旧台東製糖の日本人移民村に起源を持つ台東県の村に現存する，リノベーションされた鹿野神社である。野口はしばしばみられる「親日台湾」言説の限界を指摘し，台湾固有の事情を踏まえながら，神社再建への認識の多様性を解き明かしている。そこには，植民地期の台湾人移民や，戦後移住した「二次移民」，その後の新住民のそれぞれのコミュニティから成る重層的な社会があり，中央・地方の行政や議員の思惑が絡み，再建の目的も観光振興から個人の記憶，住民間の融合まで様々である。そして，神社は植民地期との一定の連続性を持ちながら，基本的には「台湾現地の文脈」が重要であることが示唆されている。

宗教に関しては，都市史に直接言及したものではないが，三尾編［2022］も見逃せない。この共同研究は，台湾で日本人を神として祀った廟49か所を取り上げ，フィールドワークを中心として信仰の実態を明らかにしたものである。その成果は従来の書籍やインターネット上の情報と異なり，親日観のあらわれではなく，多くの「日本神」は異常死した鬼（クイ）から変容した陰神であり，信仰の目的も大家楽という宝くじの当選番号の信託を得るなどの現世利益だったとされる。廟の多くは現在の市街地や農村中心部にあり，ポストコロニアリズムやポストインペリアリズムの視点からの問題提起もあって，植民地都市史研究にも様々な示唆を与えてくれる。

仏教寺院については，王曉鈴［2022］が植民地期に建立された弘法寺・鉄真院（湯守観音）・台北新四国八十八霊場の現在の状態を調査し，天后宮への改築なども含めて何らかの形で信仰の対象となっていることを確認しているが，その信仰は多かれ少なかれ「本土化」（意訳すれば台湾化）されていると述べられている。

以上の研究に共通するのは，近年の日本のネット空間などで目立つ，台湾の文化や社会を日本人の論理で都合よく曲解する論調への疑問の提示である。たしかに，台湾の事象は台湾の論理に沿ってまず理解されるべきであり，日本人の解釈や評価はそれを前提に行うのが当然だろう。同時に，その台湾の論理も実は多様なものであることも明らかにされており，安易な一元化も避けなければならない。

次に，近年になって目に付くのは，都市の特定の場所に視点を据え，清末から植民地期，そして現代にいたるまでの歴史空間の変遷を描いた著作である。

最近出た500ページを超える大著の王俊秀［2023］は，叙述も巧みで面白く読めたが，研究史上の位置づけは難しい。環境社会学が専門の著者は，勤務先の清華大学（新竹）の敷地の「歴史現場」をたどりながら，梅花鹿の生息地，人車軌道の敷設，日本軍の燃料廠，ゴルフ場や墓地，米軍顧問団宿舎など，次々に移り変わる地域の姿を実に詳細に描き出している。使われた史料も，日記や電話帳から図書館の蔵書印にいたるまで，多岐にわたって網羅的で的確である。しかし，これを通読してどのような歴史像が構築できるかという結論は，この本自体も強調していないし，評者も十分理解できなかった。まずは，建築学や地理学でいう

「場所性」の議論のように受け取るべきなのかもしれない。

一方，呉亮衡［2022］も一つの空間の歴史記憶を描いたものだが，かつて草山と呼ばれた山林が，植民地期に北投温泉の発見や皇太子行啓を契機に開発されて観光地となり，さらに蔣介石政権の下で陽明山と改名されて総統執務室や国民党幹部の研修施設などが置かれて政治化していくという変遷を，豊富な資料に基づきながら一般読者向けに簡潔に叙述している。一つの空間を通じて，台湾の近現代史が物語られるという面白い構成である。蘇碩斌等［2019］は，重慶南路周辺の台北中心部を舞台に，清末の台北城設置，植民地期の市街地建設，蔣介石時代の書店・出版社の集中という変遷を，いくつかのテーマに分けて叙述した論集である。

建築史では，教科書的な著作として林會承ほか［2022］がまとめられた。全 6 章のうち 1 章が「日式建築」にあてられるほか，他の章に組み込まれた部分も含めて全体の 2 割以上のページが日本建築にあてられている。植民地期の建築については，類書のような公共建築中心の叙述ではなく官舎や神社なども取り上げられ，参考文献も行き届いており，概略をつかむのに有用である。また沈孟穎［2021］は，今日に至る台湾の公共住宅の歴史を，植民地期の公営住宅・営団住宅から説き起こしており，この部分だけで本文の 4 分の 1 を占めている。簡潔な叙述ながら図版が多く，日・台の文化や生活様式の違いも意識され，わかりやすい。また，日本式の住宅に関しては呉昱瑩［2018］が豊富な図版によって概説し，同じ著者の呉昱瑩［2021］では，都市の公共建築を設計した日本人建築官僚とその作品が多数取り上げられている。

都市インフラとして重要な港湾に関しては，これまで手薄だった研究を埋める総合的な著作として，井上敏孝［2021］がある。同書は総督府の港湾政策と築港事業の分析を柱としながら，港湾都市基隆・高雄・花蓮の形成，築港技術者の育成，中国南部や南洋への進出との関連などを，総合的に明らかにしている。本稿の朝鮮の項目で取り上げる広瀬貞三の著作とともに，植民地土木官僚についての基礎的研究がそろったことになる。同じく都市インフラとしての台北の路面電車については，楊啟正［2017］が，簡潔な叙述ながら多くの新聞史料と図版を使い，地方都市の路面電車計画や官設鉄道の電化にも目配りをしている。都市公園については，林芬郁［2020］が出された。1932 年の大台北市区計画にあげられた 17 か所の公園について，その後の変遷を追った研究で，都市文化における公園の意味も考察されている。

また，台湾では植民地期の建築や街並みをリノベーションし，資料館のみならず，ショッピングモールやテーマパークなど様々な新しい用途にあてるというプロジェクトが増加している。これについて歴史的あるいは社会的な意義や背景を考察した論文は少なくないが[5]，そのような議論を単行本にまとめたものは前述の刑務所遺構の研究以外に見当たらなかった。しかし，遺構の現況について，写真とともに紹介した著作は多い。水瓶子（簡輩成）［2020］

は，台北にある 36 か所の植民地建築の，現在の用途について紹介したものである。財團法人忠泰建築文化藝術基金會［2018］は，1935 年に創設された台北の新富町食料品小売市場について，12 人の住民への聞き書きなどを基にまとめられ，植民地期の記憶も語られている。台南西市場については陳秀琍［2021］があり，植民地期から現在までの歴史，修復の工程，老舗商店の紹介などがまとめられている。呉建昇［2022］は，1930 年代に創建・増築された警察・消防施設である台南合同庁舎について，周辺の都市計画や文化財としての修復保存まで総合的に解説している。王惠君［2019］は，上記のような著作に比べて体系的な叙述が見られ，台北にある新荘・万華・西門町・大龍洞等の四地区を抽出して，代表的な建築物と市街の発展を叙述しながら，それぞれの地区の歴史空間の特性を論じている。以上のような日本の植民地建築の現況だけではなく，國立臺灣文學館［2021］は，民族主義的な文化啓蒙団体の台湾文化協会の故地を示すガイドである。文化に関しては，頼品蓉等［2017］もあり，嘉義市にあったすべての劇場を網羅していて，このうち 3 館が植民地期の創設である。葉柏強・黄家榮［2022］は地方史の図説だが，半分ほどが植民地期にあてられ，地方小都市のイメージをつかめる。日本人の著作でも，植民地建築や鉄道を紹介したものが近年数多く出版されているが，学術書や概説書というよりガイドブックや紀行文に近い内容なので，代表的なものとして片倉［2019］だけあげておく。

都市生活や都市文化に関しては，林玉茹・林建廷［2018］が，台北の市民生活をめぐる口述記録の資料集で，対象者の多くが 1920～30 年代の生まれなので，その前半生は植民地期にあたる。蔣竹山［2014］は，植民地都市の大衆生活を事典の項目のような構成で解説したもので，多方面にわたるイメージをつかむことができる。消費生活に関しては，台南の林百貨と周辺の商店街を描いた王美霞［2018］，台北の菊元百貨と周辺の商店街を描いた文可璽［2022］，現代にいたる台北の百貨店文化を描いた許麗芩編［2022］など，どれも図版を中心とした一般読者向けの読み物だが，近年の台湾社会における関心の高まりがうかがえる。文化の拠点となる図書館については，張圍東［2006］が，正史のような構成で総督府図書館の歴史と活動内容をまとめている。ユニークな主題として，簡永彬等［2019］は写真館の名称や所在地，経営した写真家，流行した技法などを紹介している。台湾の古写真は中央研究院數位文化中心などが Web 上で整理公開しているが[6]，そのような写真が生まれた背景の一端を知ることができる。

都市文化と関連して，邱函妮［2023］は美術史の研究者による著作だが，植民地都市史の視点で読んでも参考になる論点が多い。とくに，台湾・日本・中国大陸で活動した画家である陳澄波が，ふるさとの都市（嘉義）を描いた作品群を分析しながら，他郷での体験から生まれた「故郷」意識，アイデンティティ危機の帰結としての自然―文明（南国―近代都市）という対比，「想像の共同体」としての台湾文化の形成などを読み取っていく叙述から，様々な示唆を得られた。また，台北の大稲埕を題材とした郭雪湖の《南街殷賑》を詳細に分

析しながら，「近代性」や「地方色」の意味を再検討するなど，都市史や植民地近代に関連する多くの考察が含まれている。

4　朝鮮

ソウルの都市計画に関して，旧稿執筆時にたまたま未見で重要な研究が欠落したので，まず염복규［2016］から紹介したい。同書は京城府の都市計画を三段階に区分し，第一段階は1910～20 年代の市区改正事業による都心部の道路網整備（社会的葛藤にも注目），第二段階は 1930～40 年代の京城市街地計画令による空間的拡張と外郭地域の開発（宅地開発にも注目），第三段階は京仁市街地計画などによる広域都市圏構想と戦時体制（今日のソウル首都圏へつながる）として，都市計画だけでなくそれを取り巻く社会状況にも触れながらまとめている。ソウルの都市計画に関しては，旧稿でも触れた孫禎睦の古典的著作があるが，孫が研究の第一世代として史料の発掘と事実の確定に重点を置いたのに対して，廉の著書はより分析的である。都市社会への目配りや現代的視点も行き届き，わかりやすい叙述でこの分野の基本書となるだろう。

もう一つ重要な補遺として，Henry［2014］がある。タイトルにあるように，同書は京城府の公共空間における総督府の同化政策と，日朝の住民との競合の実体を描いている。まず植民地都市建設のために，1910 年代の都市名変更や王宮の非聖地化，1920 年代の道路や建築の近代化がすすめられたが，住民の非協力や予算の制約によってそれが貫徹できなかったことが指摘される。次に南山の神社に着目し，日本人社会の氏神としての京城神社への信仰が総督府の思惑と乖離していくことと，朝鮮神宮の創建によって朝鮮人も含めた神社共同体への取り込みが進んでいくことが対比される。また，京城博覧会－物産共進会－朝鮮博覧会と続くイベントで文明化・近代化を朝鮮社会に示そうとしたが，かえって批判を生んだこと，衛生思想の普及が日朝の同床異夢の中で進んでいったこと，戦時下の神社や博覧会の行事を通じた朝鮮人の包摂が次第に形骸化していくことが指摘される。最後に，解放後の公共空間の再構築に触れられる。このように，本書は近年の植民地都市研究で生まれた多岐にわたる新視点を取り入れながら，それを公共空間における同化と葛藤という枠組みでまとめあげたという研究史上の意義があるだろう。

最近の成果としては，Oh, Se-Mi［2023］が，やや難解な叙述ではあるが，ソウル史研究のみならず歴史研究の方法論に関して，意欲的な問題提起をしている。著者は，植民地都市ソウルを「堆積物の都市 City of Sediments」と呼び，建築，写真，印刷物，録音物などさまざまなメディアにあらわれた景観，文字，漫談，紋章，音声などを，あらゆる感覚を駆使して解読する。そして，その「堆積物」として，植民地都市ソウルの近代を描き出している。つまり，次々と移り変わる歴史をとらえるのではなく，古いものの上に新しいものが積み重

なっていく「堆積物」としての都市空間を再構成している。評者は旧稿と本稿を通じて，文字史料や統計史料などに基づく従来の歴史叙述とは異なる，新たなアプローチによる研究にも注目してきたが，そのような動向の一つの成果といえるだろう。

次に，都市の建築に関して，今回は住宅についての研究が目立った。まず，上下巻合わせて1300ページ以上の大著として，박철수［2021］が出た。同書は多くの一次資料を使った本格的な住宅通史で，そのうち300ページ余りが植民地期にあてられている。とりあげられた項目は，官舎と社宅，府営住宅，文化住宅，アパート，都市韓屋，営団住宅と幅広く，朝鮮住宅営団と大韓住宅公社のつながりなど，現代韓国の住宅との関連を念頭に置きながら植民地期に言及している。さらに，이경아［2019］は，20世紀前半の京城府の人口急増とともに新たな住宅地の開発が進み，様々な住宅改良の試みがあらわれ，城郭都市漢陽を解体して新たな住居文化が形成されていく経緯を，豊富な図版とともに描いた大作である。また，박철수 외［2021］は，1930年代の京城府に現れたアパートについて，一次史料や新聞雑誌，図録などに基づきながら，所在地・様式・住民・経営者・社会現象などを，総合的かつ詳細に明らかにした研究である。このほか，今日の北村韓屋村をはじめ，1930年代を中心に造成された朝鮮人住宅地について，김경민［2017］が，ディベロッパー鄭世権の事業活動や朝鮮物産奨励会とのかかわりなどを叙述している。

建築にかかわる読み物としては，김소연［2017］が，植民地期に活躍した建築家とその作品を紹介している。이영천［2022］は，開港から植民地初期の建築をめぐるエッセイである。また，서울역사편찬원［2018-2］は，京城府の公共建築の図面を中心とした図説資料集である。

一方，台湾の項目でも紹介した植民地建築の保存と再利用に関して，韓国ではLee, H. K.［2019］が，事例研究に基づく包括的な議論を展開している。Leeは冒頭に紹介した刑務所遺構の研究の共著者でもある。同書では，文化遺産をめぐる従来の議論を整理しながら，植民地期の建築などをいわゆる「難しい遺産 difficult heritage」と考え，「否定的な遺産 negative heritage」や「負の遺産 dark heritage」と区別している。そして，そのような「難しい遺産」の保存や展示と，ナショナルアイデンティティの形成との関係に言及する。具体的には西大門刑務所（恐怖と暴力の象徴から自由と勝利の象徴へ），景福宮と総督府庁舎（権力闘争とナショナルアイデンティティの争点），東大門運動場（韓国の伝統－植民地の記憶－未来への夢）を事例として検討し，建築がどのように選択的に破壊，保存，または再建されたかを論じている。本稿で紹介した台湾の事例を含めて，あるいは世界中で議論になっている植民地遺産の扱いをめぐる議論とも関連して，今後も深めていくべき論点であろう。

土木官僚については，広瀬［2023］が刊行された。この本は，『職員録』などを用いて総督府の土木官僚の全体像を統計的に明らかにし，さらに土木官僚の著作や論文に依拠しなが

ら個人の業績や言説を分析している。その中で，都市史にかかわる分野では，総督府内務局京城出張所・平壌出張所の人員分析，橋梁工事や市街地計画などに触れられている。土木官僚の場合，道路・港湾・治水など全土にわたる事業を担当したため，建築官僚に比べて都市固有の業務は限定されるが，上述のようないくつかの分野では今後も参照すべき基礎的な研究となるだろう。

都市の重要なインフラである公園については，旧稿で紹介から漏れた강신용・장윤환［2004］を改めて紹介しておく。同書は開港期の公園観から説き起こし，主要な都市公園開設の経緯，総督府の公園政策，神社との関係，解放後の公園計画などを叙述した通史である。また，ソウル初の都市公園であるタプコル公園（パゴダ公園）に関する展覧会図録として，공평도시유적전시관［2022］がある。鉄道と都市に関しては，京城について정재정［2018］，釜山について전성현［2021］が出された。前者の前半は，京城を起点とする鉄道網や運営主体の変遷など，一般的な鉄道史と重複する。しかし後半は，観光，戦争，市民生活など，植民地都市京城と鉄道とのつながりが多面的に叙述され，別冊として図録が付いている。後者は，釜山の鉄道を地域史として描くことを強く意識し，植民地都市建設と東萊線，路面電車と地域社会の力学，東海線と地方政治や地域社会などを分析している。このほか，ソウルの路面電車に関する展覧会図録として，서울역사박물관［2019］がある。

旧稿でも触れた植民地のモダニティについては，冒頭に紹介した Kim, J. E.［2019］のほか，様々なテーマで出版が相次いでいる。まず，旧稿で紹介を失念した서지영［2013］である。同書では，モダンガールが日本本国のような職業婦人や女学生だけでなく，女工・妓生・女給などを含む，都市空間において自己認識を持つ視線の担い手として定義され，大衆メディアの表象，都市における消費，労働や移動の主体としての女性など様々な様相がとらえられている。関連して植民地期の妓生，つまり券番妓生に関しては，新しい視点の研究が出された。신현규［2022］は，文化コンテンツという概念から，妓生が創作した文学や，妓生の口述記録，妓生を素材としたコンテンツなどが考察されている。また，황미연［2013］は全羅北道の券番妓生を対象としながら，芸術教育機関，近代的芸能産業として券番を位置付けている。

このほか，박주택 외［2022］は，1920・30 年代のソウルを中心に，自主的な近代性を表現した文学作品や新聞雑誌記事を抜粋して編まれた資料集である。モダニティを象徴する施設に関しては，映画館の団成社（이순진［2011］）や釜山映画社（최철오［2022］），茶房（タバン）やカフェ（장유정［2008］），賭博や百貨店（강심호［2005］）について，それぞれ小冊子の読み物だが概略をつかめる本が出ている。朝鮮人経営の百貨店として代表的な和信については，展覧会図録として서울역사박물관 도시유적전시과［2021］が出された。

一方，朝鮮に関しても台湾と同様に，都市の特定の場所に視点を据え，その歴史的変遷をたどる研究がみられるようになった。이순우［2012］は，景福宮の光化門の前をつらぬく光

化門通（現・世宗大路）をテーマとして，朝鮮王朝末期の中央官庁（六曹）の並ぶ通りが，植民地期に総督府庁舎と官庁街に変貌するという歴史的空間と景観の変化を跡付けている。同じ著者の著した이순우［2022］では，朝鮮軍の兵営や京城駅開業以前の鉄道の起点が置かれていた龍山地区を取り上げ，歴史的空間の変化だけでなく，様々な施設や住民の生活まで，二巻の大著にまとめている。

植民地都市の日常については，서울역사편찬원［2018-1］が，京城府民の余暇生活を紹介している。複数の著者によって流行歌・映画・居酒屋・プール・外食・ギャンブルが論じられた。同様のテーマで，より簡潔に京城府から現代のソウルにいたるまでの余暇生活を概説したのが서울역사편찬원［2019］である。戦時下の総動員体制と京城府民の生活については，서울역사편찬원［2020-3］がある。また，旧稿の補遺として한철호 외［2013］は，日韓共同研究の成果として韓国併合への認識と対応，群山居留民団，慶州観光，大邱の女学生というテーマが論じられている。京城府の女学生の生活の諸相については，서울역사편찬원［2020-2］がある。박현수［2022］からは，文学作品に現れた外食文化のモダニティについて知ることができる。김복준［2022］は，京城で起きた殺人事件をテーマとして，当時のグロテスクな報道の表面だけでなく，その背後に植民地下の人々の苦痛を読み取ろうとした元警察学校教授の著作である。권오영 외［2021］は，植民地期を中心に都市の衛生と防疫について探究した論文集で，これと関連する서울역사편찬원［2021］は，近現代ソウルの公共医療を扱った論文集のうち，二つの章が植民地期を対象としている。

近年はアジア全域でこのような日常生活をテーマとする研究が増えており，それぞれが重要な内容を持つが，ほとんどが論文集で，論点が多岐にわたるため詳細は割愛する。

遊郭については，金富子・金栄［2018］が出された。同書は，日本式遊郭が開港後の居留地遊郭から日清・日露戦争期の占領地遊郭，そして植民地遊郭（植民地公娼制）へと変遷したとして，京城・馬山・鎮海・羅南・会寧・咸興・慶興について，現地調査や口述記録を含めて形成過程を明らかにしている。関連して，高麗博物館朝鮮女性史研究会編著［2021］は，朝鮮の都市史を直接扱ったものではないが，日本に渡った朝鮮女性が朝鮮料理店や産業慰安所で娼妓化していった事実を明らかにしている。

次にソウルに関して，서울역사편찬원［2020-1］は，ソウル歴史編纂院が主催する歴史講座を活字化したシリーズの1冊だが，本稿で取り上げた学術書の著者も複数含まれ，植民地都市ソウルに関する様々な視点を学ぶことができる。また，서울역사편찬원［2002］は，総合的な写真集である。また，今回は植民地都市行政に関する著作が少なかったが，서울역사편찬원［2017］は，京城府尹と府会議員に関する総合的な論文集で，巻末には府尹・高等官・府（協議）会議員の名簿と経歴も付されている。

ソウルに関する図録は，注目すべきものが何点か出版されている。서울역사박물관［2018］は，旧稿でも紹介した2015年復刻の鳥瞰図『大京城府大観』（1936年）と，その姉妹編で

1937 年刊行の『大京城都市大観』に掲載された商店などを，対照させながら復刻したもので，貴重な視覚資料がさらに利用しやすくなった。また，김영하・冨井正憲・戸田郁子［2017］は，『大京城府大観』のうち仁川の部分を拡大したものである。서울역사박물관［2017］は，ソウル歴史博物館の海外調査の成果として刊行され，写真技師・野口三四郎の描いたソウルのスケッチと，画家安藤義重の描いた釜山のスケッチを，関連する論考とともに図録にしたもので，写真とは異なる独特の雰囲気を伝えてくれる。

最後に地方都市に関しては，光州における日朝の葛藤を描いた정경은［2022］，大邱に関する歴史エッセイである정영진［2021］，済州島の日本人居留民を対象とする김은희［2022］などがある。また，かなり以前に出版された최영호 외［2007］を旧稿の補遺としてあげておくが，同書は関釜連絡船をテーマとしながら，釜山の日本人社会の形成，在朝日本人の朝鮮認識，敗戦後の日本人引揚げなどについて論じたものである。

5　中国

満州に関しては，O'Dwyer［2015］が大連，Sewell［2019］が長春／新京の都市史を包括的に叙述している。O'Dwyer は大連を「他に類を見ない都市」と呼び，日本人人口比の高さだけでなく，租借地であること，日本人住民の自治志向が強いこと，満鉄の存在が大きいことなどに注目する。そして，日本人住民の本国との交渉や政治参加を跡付け，満鉄下級社員の日記を分析し，上海租借地との比較や釜山との対抗に言及するなど，多くの成果をあげている。全体として，植民地都市の日本社会や日本人住民を分析する近年のアメリカの研究動向に連なる成果といえる。一方，Sewell の著書は，前半で長春／新京の都市計画と建築，後半で経済開発と植民地社会が取り上げられ，1905 年から 45 年までを扱うが，鉄道都市の長春と満州国首都の新京が対照的に論じられる。前半については，日本でも越沢明や西澤泰彦らの研究があるが，Sewell は日本の優位性の裏付けとして意図された近代性を強調する。また，後半では，植民地を本国と同一の社会と考える日本人の意識を問題とする。全体として，日本における従来の研究の枠組みや問題意識と共通する側面を持つ研究といえるだろう。

租借地だった関東州については，21 名の口述記録を集めた徐成芳・齐红深［2022］が出された。インフォーマントの性別や経歴は多様で，台湾出身者や国民党特務など異色の履歴を持つ者もいて，日本人に対する感情も紋切り型の「支配と抵抗」の叙述にとどまらず興味深い内容である。

日本軍占領下の上海については，旧稿で重要な研究が抜けていたので，Fu［1993］を改めて紹介したい。この本は，占領下の知識人の反応を抵抗と協力という二分法で図式的に断罪せず，極限状況下で消極性，抵抗，協力という三つの反応があったと考え，作家たちの行動や主張をたどりながら道徳的曖昧さ（プリーモ・レーヴィのいう「グレーゾーン」）を描

き出している。このほか，占領下の上海に関する日中対訳の写真集として，上海市档案馆［2010］がある。

占領以前の上海の租界における日本とのかかわりについては，陳雲蓮［2018］が新たな視点を提供している。従来は上海租界における都市開発を「西洋化」とみることが多かったが，本書はそれを「国際競争下の租界開発」と考え，日本による都市形成も重視する。具体的には虹口港建設や北四川路の住宅開発を分析し，独特の都市空間の出現を論じている。全体としては，日本との関係に特化した研究ではないが，多くの史料に裏付けられた新視点として注目すべきだろう。

中国都市における日本的要素については，青島でも単荷君［2023］がとりあげている。単は，青島の都市研究ではドイツ・日本・中国の三要素を検討すべきだが，日本については閑却されてきたとして，前後16年にわたる日本支配下の都市形成を検討している。青島の都市化は，青島港と山東鉄道によるドイツの「模範的」植民地建設で始まったが，日本の占領によって工業地帯・住宅地・遊郭・神社などの建設と中国人との雑居という日本的要素が強まり，山東還付後も在華紡や商人によって日本的要素が強く残ったとされる。そして，中国都市の伝統の不在と，日本以外の有力な外国勢力の不在という条件下で，日本の民間主導によって，空間的・物質的な面だけでなく社会的・制度的な面も含めた都市形成が進んだと指摘している。日本占領期の青島については，旧稿から漏れた本庄編［2006］をあげなければならないが，多数の著者による論集なので内容は割愛する。

日本租界のあった天津に関しては，これまで研究が手薄だった日本居留民団を程维荣［2021］が分析している。主に中国で編まれた《天津日本租界居留民团资料》に依拠しながら通史的にまとめ，天津の市政や社会への影響についても考察している。また，日本軍の占領以降の天津は，治安維持会－特別市公署－特別市政府という中国人を担い手とする傀儡機関に統治されたが，その内実を中国側の档案や新聞によって論じているのが冯成杰［2021］である。政権の機構だけでなく，イギリスとの衝突，社会政策や防疫，市民の日常生活などについても言及されている。

日本軍占領下の香港については，今回は紹介すべき学術書を見出せず，絵葉書の集成である張順光・陳照明［2021］と，旧稿で漏れた図録である高添強・唐卓敏［1995］と周家建・張順光［2015］を紹介するにとどめる。とくに周家建らの図録は，歴史档案館にもほとんどないという占領下の大衆生活にかかわる伝票や乗車券などを民間から集め，写真版で収録している。

このほか，吉田初三郎や金子常光など日本人画家の描いた中国都市の鳥瞰図を収録した锺翀［2018］が出たが，その中には奉天や旅順などの植民地都市も含まれている。また，旧稿の補遺として，中国各地の日本領事館に着目した田中重光［2007］をあげておきたい。同書は，領事館建築が初期の植民地建築を担ったと考え，満州国の「国威発動（ママ）を意図したような，

露骨な日本趣味の表現に終始した官公庁建築」と対比して，領事館の「おおむね西欧新古典主義風や折衷様式の良識ある意匠」である様式や機能を分析し，関連する日本人建築家にも触れている。外交史料館の文書から図面を起こすなど，建築技術者としての著者の技能を生かした建築史の視点からの実証研究である。

6　おわりに

以上のように，近年の旧日本植民地の都市史研究の対象は，以前に多かった建築や都市計画の分野から，文化や社会現象へと広がりを見せ，モダニティ，ジェンダー，公共，日常生活など，他の学問分野と対話が可能なさまざまな視点が取り入れられてきた。そしてもう一つの傾向は，ポストコロニアリズムやポストインペリアリズム，そして物的な植民地遺産の継承など，現在の社会が植民地をどのようにみるか，あるいは植民地支配が現在の社会にどのような影響を残しているか，といった現代的関心が以前よりも強く反映されるようになったことである。さらに，植民地相互の同時代のつながりへの注目や，植民地間の比較研究の萌芽もみえる。

この先，こうした動向がさらに進展することになるだろうが，それが蓄積されたところで本稿の続編を執筆してみたいと思う。今回の紹介から漏れた重要な研究もあるだろうが，これも，その際に補遺をしていきたい。

注 ――――――――

1）橋谷弘「植民地都市史研究の成果と課題」（『東京経大学会誌』297 号，2018 年 2 月）。

2）永井良和「植民地都市――近代日本が経験したもうひとつの都市」（『日本都市社会学会年報』16，1998 年）。

3）人文地理学会編『人文地理学事典』（丸善出版，2013 年）。

4）若林正丈「台湾の政治――中華民国台湾化の戦後史」東京大学出版会，2008 年，菅野敦志『台湾の国家と文化――「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』勁草書房，2011 年など。

5）さしあたって，張海燕「台北における近代化遺産の保存と活用の両立」（『名城論叢』20 巻 4 号，2020 年 3 月），武知正晃「台湾における日本時代の建築物を見る眼差し――近年なぜ神社の「復興」が目立つのか――」（『非文字資料研究』13，2016 年 9 月），郭雅雯・髙田光雄・清水貴史「日本統治時期から現在までの台北市青田街における日式住宅の変容過程――台湾の日式住宅における居住区間の変容過程に関する研究　その 3」（『日本建築学会計画系論文集』75 巻 658 号，2010 年 12 月），石井清輝「歴史的環境の保存活動を媒介とした「地域の公共性」の生成過程――台湾における日本式木造家屋群を対象として」（『関東都市学会年報』16 号，2015 年 3 月），松田ヒロ子「台湾における日本統治期の遺構の保存と再生――台北市青田街の日本式木造家屋を中心に」（蘭信三編『帝国以後の人の移動――ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点』勉誠出版，2013 年），Hyun Kyung Lee and Shu-Mei Huang ‘The ‘com-

modified' colonial past in small cities: shifting heritagemaking from nation-building to city branding in South Korea and Taiwan', "International Journal of Cultural Policy" 28 (5), 2022.7, H. Kamizuru 'Significance of heritage in decolonization: Taiwanese colonial experiences and their appropriation of Japan's imperial-era buildings', in Y. Mio ed. "Memories of the Japanese Empire", Routledge, 2021, Min-Chin Chiang et al. 'Policy Formation and Civil Society Engagement in Heritage-Making in Taiwan: A Historical Examination', in Hsin-Huang Michael Hsiao et al. ed, "Citizens, Civil Society and Heritage-Making in Asia", ISEAS–Yusof Ishak Institute, 2017, Y. Amae 'Pro-colonial or Postcolonial? Appropriation of Japanese Colonial Heritage in Present-day Taiwan', Journal of Current Chinese Affairs 40–1, 2011. 3 などを参照されたい。

6）橋谷弘「近代日本・アジア関係視覚資料の所蔵・公開・研究の現状」（『東京経大学会誌』307号，2020年12月）。

文 献 リ ス ト

Ⅰ　日本の植民地全般

日本語文献（著者名50音順）

伊藤るりほか編［2010］：モダンガールと植民地的近代――東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー，岩波書店

辻子実［2003］：侵略神社――靖国思想を考えるために，新幹社

中島三千男［2013］：海外神社跡地の景観変容――さまざまな現在，お茶の水書房

中国語文献

陳姃湲主編［2018］：日本殖民統治下的底層社會――臺灣與朝鮮，中央研究院臺灣史研究所

英語文献（著者名アルファベット順）

Huang, S. M. and Lee, H. K.［2019］: Heritage, Memory, and Punishment: Remembering Colonial Prisons in East Asia, Routledge

Kim, J. E.［2019］: Urban Modernities in Colonial Korea and Taiwan, Brill

Ⅱ　台湾

日本語文献（著者名50音順）

井上敏孝［2021］：日本統治時代台湾の築港・人材育成事業，晃洋書房

片倉佳史［2019］：台北・歴史建築探訪――日本が遺した建築遺産を歩く，ウェッジ

金子展也［2018］：台湾に渡った日本の神々――フィールドワーク日本統治時代の台湾の神社，潮書房光人新社

邱函妮［2023］：描かれた「故郷」――日本統治期における台湾美術の研究，東京大学出版会

野口英佑［2023］：台湾における「日本」の過去と現在――糖業移民村を視座として，ゆまに書房

三尾裕子編著［2022］：台湾で日本人を祀る――鬼から神への現代人類学，慶應義塾大学出版会

中国語文献（著者名拼音順）

財團法人忠泰建築文化藝術基金會［2018］：市場歳月――新富町庶民生活的軌跡，馬可孛羅文化
陳秀琍［2021］：臺南西市場，臺南市政府文化局
國立臺灣文學館策劃［2021］：文協一百點――臺灣真有力地景指南，同館
簡永彬等［2019］：凝視時代――日治時期臺灣的寫真館，左岸文化
蔣竹山［2014］：島嶼浮世繪――日治臺灣的大衆生活，蔚藍文化
賴品蓉等［2017］：嘉義市老戲院踏査誌，台灣圖書室
林芬郁［2020］：公園地景百年流轉――都市計畫下的臺北，邁向現代文明的常民生活史，貓頭鷹出版
林會承・徐明福・傅朝卿［2022］：台灣建築史綱，國立臺北藝術大學
林玉茹・林建廷［2018］：雙城舊事――近代府城與臺北城市生活記憶口述歷史，中央研究院臺灣史研究所
沈孟穎［2021］：台灣公宅 100 年――最完整圖説，從日治，美援至今的公共住宅演化史，創意市集出版
水瓶子（簡輩成）［2020］：臺北老屋三生事，典藏文創
蘇碩斌等［2019］：臺北城中故事――重慶南路街區歷史散歩，左岸文化
王惠君［2019］：臺北歷史・空間・建築――新莊・艋舺・西門・大龍峒・圓山・劍潭，左岸文化
王俊秀［2023］：新竹清華園的歴史現場，國立清華大學出版社
王美霞［2018］：熱戀林百貨・熱戀臺南，遠流出版
王曉鈴［2022］：縱弘法寺到天后宮：走訪日治時期臺北朝聖之道，時報文化
文可璽［2022］：菊元百貨漫歩臺北島都，前衛出版
呉建昇［2022］：府城守護者――臺南合同廳舎的時空記憶，台南市政府文化局
呉亮衡［2022］：再見・草山　陽明山的這些年那些事，時報文化
呉昱瑩［2018］：圖解台灣日式住宅建築，晨星出版
呉昱瑩［2021］：跟著日本時代建築大師走――一次看懂百年台灣經典建築，晨星出版
許麗芩編［2022］：潮百貨流時光――圖説臺北人的百貨公司，臺北市立文獻館
楊啟正［2017］：臺灣市街電車夢，玉山社
葉柏強・黄家榮［2022］：帶你回花蓮――穿梭街市百年，花蓮縣花蓮市公所
張園東［2006］：走進日治臺灣時代――總督府圖書館，台灣古籍出版

英語文献

Dawley, E.［2019］: Becoming Taiwanese ― Ethnogenesis in a Colonial City, 1880s–1950s, Harvard University Asia Center

Ⅲ　朝鮮

日本語文献（著者名 50 音順）

金富子・金栄［2018］：植民地遊郭――日本の軍隊と朝鮮半島，吉川弘文館
高麗博物館朝鮮女性史研究会編著［2021］：朝鮮料理店・産業「慰安所」と朝鮮の女性たち，社会評論社
広瀬貞三［2023］：朝鮮総督府の土木官僚――植民地支配の社会基盤整備者，明石書店

韓国語文献（著者名가나다라順）

강신용・장윤환［2004］：한국근대 도시공원사，大旺社

강심호［2005］：대중적 감수성의 탄생——도박，백화점，유행，살림

공평도시유적전시관［2022］：탑골공원——서울 최초의 도시공원，공평도시유적전시관

권오영 외［2021］：도시를 보호하라——위생과 방역으로 세워진 근대도시 이야기，역사비평사

김경민［2017］：건축왕，경성을 만들다——식민지 경성을 뒤바꾼 디벨로퍼 정세권의 시대，이마

김복준［2022］：경성 살인사건，우물이있는집

김소연［2017］：경성의 건축가들——식민지 경성을 누빈 'B 급' 건축가들의 삶과 유산，루아크

김영하・冨井正憲・戸田郁子［2017］：모던인천시리즈 1 조감도와 사진으로 보는 1930 년대，토향

김은희［2022］：근대 제주 일본인 거류민 연구，경인문화사

박주택 외［2022］：모던 경성과 전후 서울，모던앤북스

박철수［2021］：한국주택 유전자 1——20 세기 한국인은 어떤 집을 짓고 살았을까 ?，마티

박철수 외［2021］：경성의 아파트，집

박현수［2022］：식민지의 식탁，이숲

서울역사박물관［2017］：1920～1930 년대 그림으로 보는 경성과 부산，서울역사박물관

서울역사박물관［2018］：〈대경성부대관〉과『대경성도시대관』으로 보는 경성 상점가，서울역사박물관

서울역사박물관［2019］：서울의 전차，서울역사박물관

서울역사박물관 도시유적전시과［2021］：화신백화점—사라진 종로의 랜드마크，서울역사박물관 도시유적전시과

서울역사편찬원［2002］：일제 침략 아래서의 서울（1910～1945），서울역사편찬원

서울역사편찬원［2017］：일제강점기 경성부윤과 경성부회 연구，서울역사편찬원

서울역사편찬원［2018-1］：일제강점기 경성부민의 여가생활，서울역사편찬원

서울역사편찬원［2018-2］：경성부 건축도면 자료집，서울역사편찬원

서울역사편찬원［2019］：근현대 서울 사람들의 여가생활，서울역사편찬원

서울역사편찬원［2020-1］：식민도시 경성，차별에서 파괴까지，서울역사편찬원

서울역사편찬원［2020-2］：일제강점기 경성지역 여학생의 운동과 생활，서울역사편찬원

서울역사편찬원［2020-3］：일제 말기 경성지역의 강제동원과 일상，서울역사편찬원

서울역사편찬원［2021］：근현대 서울의 공공의료 형성，서울역사편찬원

서지영［2013］：경성의 모던걸——소비・노동・젠더로 본 식민지 근대，여이연（姜信子・高橋梓訳『京城のモダンガール——消費・労働・女性から見た植民地近代』みすず書房，2016 年）

신현규［2022］：기생——문화콘텐츠 관점에서 본 권번기생 연구，연경문화사

염복규［2016］：서울의 기원 경성의 탄생——1910-1945 도시계획으로 본 경성의 역사，이데아（橋本妹里訳『ソウルの起源　京城の誕生——1910～1945 植民地統治下の都市計画』明石書店，2020 年）

이경아［2019］：경성의 주택지——인구 폭증 시대 경성의 주택지 개발，집

이순우［2012］：관화문—육조앞길，하늘재

이순우［2022］：용산，빼앗긴 이방인들의 땅，민족문제연구소（①일본군 병영지와 용산역・②효창원과 만초천 주변）

이순진［2011］：조선인 극장 단성사 1907-1939，한국영상자료원

이영천［2022］：근대가 세운 건축，건축이 만든 역사——역사따라 살펴보는 경성 근대건축，루아크

장유정［2008］：다방과 카페，모던보이의 아지트，살림
전성현［2021］：식민지 도시와 철도――식민도시 부산의 철도와 식민성，근대성，그리고 지역성，선인
정경은［2022］：광주의 근대 풍경，문학들
정재정［2018］：철도와 근대 서울，국학자료원
정영진［2021］：국난기의 사건과 인물로 보는 대구 이야기，푸른사상사
최영호 외［2007］：부관연락선과 부산―식민도시 부산과 민족 이동，논형
최철오［2022］：초창기 부산 영화사 1889 년～1925 년――극장과 영화흥행，한국학술정보
한철호 외［2013］：식민지 조선의 일상을 묻다，동국대학교출판부
황미연［2013］：권번과 기생으로 본 식민지 근대성――일제강점기 전라북도를 중심으로，민속원

英語文献（著者名アルファベット順）

Henry, T.［2014］：Assimilating Seoul ―― Japanese Rule and the Politics of Public Space in Colonial Korea, 1910–1945, University of California Press
Lee, Hyun Kyung［2019］：'Difficult Heritage' in Nation Building ―― South Korea and Post-Conflict Japanese Colonial Occupation Architecture, Palgrave Macmillan
Oh, Se-Mi［2023］: City of Sediments ―― A History of Seoul in the Age of Colonialism, Stanford University Press

Ⅳ　中国

日本語文献（著者名 50 音順）

田中重光［2007］：大日本帝国の領事館建築――中国・満洲 24 の領事館と建築家，相模書房
陳雲蓮［2018］：近代上海の都市形成史――国際競争下の租界開発，風響社
単荷君［2023］：近代青島の都市空間の変容――日本的要素の連続と断絶，ミネルヴァ書房
本庄比佐子編［2006］：日本の青島占領と山東の社会経済 1914–22 年，東洋文庫

中国語文献（著者名拼音順）

程维荣［2021］天津租界与日本居留民团，上海社会科学院出版社
冯成杰［2021］日伪在天津的统治研究，江苏人民出版社
高添強・唐卓敏［1995］：圖片　香港日佔時期，三聯書店（香港）
上海市档案馆［2010］：日军占领时期的上海，上海人民出版社
徐成芳・齐红深［2022］：『关东州』历史记忆，人民出版社
張順光・陳照明［2021］：明信片中的日佔香港影像，三聯書店（香港）
锺狮［2018］：旧城胜景日絵近代中国都市鸟瞰地图（增订版），上海书画出版社
周家建・張順光［2015］：坐困愁情――日佔香港的大眾生活，三聯書店（香港）

英語文献（著者名アルファベット順）

Fu, P［1993］：Passivity, Resistance, and Collaboration: Intellectual Choices in Occupied Shanghai 1937-1945, Stanford University Press
O'Dwyer, E.［2015］: Significant Soil: Settler Colonialism and Japan's Urban Empire in Manchuria, Harvard University Asia Center
Sewell, B.［2019］: Constructing Empire: The Japanese in Changchun, 1905–45, University of British Columbia Press